

10
108

井上正鐵翁遺訓集 卷二

井上正鐵翁遺訓集 卷二

東泉圖書				
	188	4	1	
冊	号	架	函	類

35.9.13

井上正鐵翁遺訓集卷之二



初^{そつ}便^{たより}一
難^{がた}罪^{ざい}三
生^{なま}念^{ねん}四
養^{やしやう}様^{さま}々^づノ^の五
心^{こころ}願^{ねがひ}成^{なり}就^{じゆ}六

金^{かね}剛^{がう}七
理^り人^{ひと}ヲ^を屈^{くつ}八
病^{びやう}身^み子^こ教^{おし}九
布^ふ止^と麻^あ通^{とよ}十
鐵^{てつ}一^{いち}字^じ主^{しゆ}



№ 7178

雨あめ祭まつり四よ欲う之の御おん諭ごん腰こし禮れい産むす靈たま直ただ主しゅ
 乞こ文ぶん命めい命めい折おれ樂がく直ただ主しゅ
 丸まる丈たい丈たい丈たい丈たい丈たい丈たい丈たい

雷らい鳴めい其その信しん心しん家か業ごう一いつ甚しん甚しん甚しん甚しん甚しん甚しん
 病びやう人にん介かい抱う我わが思おも惡あく敷しき惡あく人にん不ふ可か捨しや身み曾そ貴き世せ燈とう火ひ平へい

初便



此の良辰は百五十年は世に於ては
 初便に於ては、
 此の良辰は百五十年は世に於ては
 初便に於ては、
 此の良辰は百五十年は世に於ては
 初便に於ては、

一、

流人字一人と申す者振舞うま
より二三日村流人家持と申す世結人向
道より美の徳入用向動定取一虫持
流人虫持つみまのと一又虫とたは山鹿也
此虫集の流人の若く米とまをとりまを
此虫の虫持入世結とて此虫の虫持
留る者流人つみまのと申す者教方十日間

飛仕程又昨日津島村と申す知得と申す村
より三里大難虫と通る美の世結人向
道より右村方流人取等虫持物
取一振舞うまの虫持の虫持虫持先
一通り相持ひきまと申す虫持と申す者虫持
よ新流人美の虫持と何の徳の虫持流人
又と虫卵の虫持と申す者虫持と申す者

右の振舞未出来争ひの持違ひ
中^まの流^り及^び具^ぐ在^ざ親^{しん}近^{しん}流^り人^に及^び者^を下^げ流^り
動^{うご}之^の所^を一^つ上^へ流^り入^り少^く無^く下^げの^り
より好^く古^きを^とりて一^つ推^し有^り流^り動^{うご}之^の
五^ご所^の之^の不^ふ備^び又^も不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
下^げ世^の之^の不^ふ備^び其^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
付^つ金^の中^の之^の不^ふ備^び其^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び

因^に指^し取^り振^りの^り備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
此^の形^の中^の及^び人^の集^りの^り不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
故^ゆ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
此^の形^の中^の及^び人^の集^りの^り不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
中^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
下^げ世^の之^の不^ふ備^び其^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び
此^の形^の中^の及^び人^の集^りの^り不^ふ備^び之^の不^ふ備^び之^の不^ふ備^び

富貴者若官業をせし中皆候は應て
難儀と仕申候てお侍候をせむは難儀
加後田と難儀をせむは難儀今も昔も
船中とて病氣ひやうの者もは難儀しやうの上末病人しやう
多くは難儀の者も皆候は難儀
又業の難儀しやうとて一難儀をせむは難儀
一難儀は違ふの者相候は難儀

西舟のふり世夜よの船は違ふ物なり
は難儀しやうとて交ぬ別候中とて難儀
は難儀しやうは違ふなり

一富貴者先達者長江氏を以難儀とて持持もち
米とて改め候は違ふなり也甚難儀
人業の難儀は違ふなり候は難儀
先達者長江氏は難儀とて十人持持候は違ふ

とらひのり一掃裁断せしむるも志と此物
亦多し此の世方とせしむる故と善方も
仕半取志のよきは極と信下極す此
市上ともはるるしめせしむる家守可
由儉約俸付しれ此如かく上も減り以
志入也た何率世とは相續の爲に臣は
ゆるる志あるのり官取はる爲に計しむる如くも

一 半の世と六幕食幕後と之法の爲に
推し仕はるる家守は是なり一なり
一 此取のよか後成りせしむる世交同律
一 同骨形はもやの善徳は命と保ち幕の
羅と消滅ししと志ととげは爲の律と
ゆるる金銭ありと如く船中とを法に法
の命とち切よたともちの根中とゆるる律

よきもなき世に控まると世方をそも大
物への持来候へばも大方に世に控りす
なよお成りし世のうらやまの御事せんじの
御ものづれ候は候は地獄ぢごくの沙汰も金
次第も中世の今度の御事候へばも
神助の加後まといふまに御事候へばも
まじりと相見の中は長坊ながぼうと世交同船の

考よ玉成たまの今と持来候へばも御事候へば
らぬのよ今まの御事候へばも御事候へば
御事候へばも御事候へばも御事候へばも
中よ又ま人の今まの御事候へばも御事候へば
病びやう死し候へばも御事候へばも御事候へばも
御事候へばも御事候へばも御事候へばも
御事候へばも御事候へばも御事候へばも
御事候へばも御事候へばも御事候へばも

入用の時と神の誓ふに携けまゝなり
かみ半帯と金足おらそとにきく藤原藤
根と名に携るに世をとり船中ととも世地
まとも命合と人よつた命と名携も藤原
とも皆何とて記名とてしるなり金足
およそまといし年なるつとに携るなり
まよはし同よはの所まびつらひせらるる候と

何れも信のつたるもの居候なり
一か及氏は女のつと世何相候はは葉の
しよ子は松子の葉葉は中候なり
一はつ中の方より世のたに候は遠近下
まれまをまをまれはれとて候なり
まをまをまをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまをまをまを

別れ上と様も是のまをさるの如
誓ひし一筆のまをさる如

愛起

本中川様

御難

他日とは書面下へ未だ見合は世々遠慮
江作付年法をの上から七年以迄
より加ふる年の首と元膳のしる
也たあしよや今まににおぼれま
ふまをさるの如くは法を元乃社
日蓮と遠慮のしる或は首の座
なまの年一交組或は出組の如

二

と又徳法と法とをのまをのまの
道にぬらふとまのまの勿神の
神君らと天下の民の爲に九死と
一生と得る事十八年と作れぬ
笑ゆべ我おまのまの

天照皇太神の神法神國の神道
の爲に推素子と推素子と推素子
と推素子と推素子と推素子

全善民安穩のこめ

東照宮大権現の法徳を修し
下事の人事を修し
おまの神の法を修し
神の法を修し
神の法を修し
神の法を修し
神の法を修し
神の法を修し

地は廣大なる海に又海に
も神の誓ひの遠くまで
天地の誓ひよもぬ人か
結冊兩神の徳とらふ
古の
風と息盧道下公日ら
海へのけく我ら

野の上を城はたし

流 罪

近代筆は遠くは西
智恵の思ふと
山は皆は
大慶ふ

是又年多し目出な存病し勢一^{ちう}し
年と羅^{つと}対^ごを^みか^らく^きし^年と^は信^しの^由
在^し信^しと^は運^んの^由の^まを^あは^れし
し^合の^次の^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
は^年を^あは^れし^信の^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
神^の加^への^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
と^あは^れし^信の^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし

有^るに^は信^しの^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
神^の加^への^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
阿^の公^の加^への^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
と^あは^れし^信の^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
又^も信^しの^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
は^年を^あは^れし^信の^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし
と^あは^れし^信の^まを^あは^れし^信の^まを^あは^れし

本出らるる事とて申すは神事よは留り申

りて神意の事もお計じ申す事

一 少の申す思儀の結ぶの神業とて當り

申すり申す事何事未代迄も此法は續

けり申す事何事未代迄も此法は續

永代地面ある事下層まで申す事此代地

盤そのの交り申す事申す事納金送る事

別世の地面ある事申す事申す事

申す事申す事申す事申す事申す事

他方を以ては申す事申す事申す事

申す事申す事申す事申す事申す事

申す事申す事申す事申す事申す事

申す事申す事申す事申す事申す事

一 先達の中申す事申す事申す事申す事

お成り申しと思はれまゝの御座り候へども
すなわ時^{まじ}に申し候へども又^{まじ}も甚念^{まじ}に申し候へども
その御座り候へども思はれまゝの御座り候へども
大由野^{まじ}に申し候へども又^{まじ}も甚念^{まじ}に申し候へども
と申し候へども又^{まじ}も甚念^{まじ}に申し候へども

九月日

藏

心文後

養生

六月九日申し候へども又^{まじ}も甚念^{まじ}に申し候へども
始由野^{まじ}に申し候へども又^{まじ}も甚念^{まじ}に申し候へども
大慶^{まじ}に申し候へども又^{まじ}も甚念^{まじ}に申し候へども
申し候へども又^{まじ}も甚念^{まじ}に申し候へども

四

一 控り、中、痛まのり、押く、強後乃
半と存の志か、なごら、時、以と、全世ぜんせいの
り、先と、目出、夜、然び、以、空、あ、を、解かい
毒、去、り、を、何、と、不、す、こ、中、の、に、お、成、り、以、能よき
解、脱げだつと、存、の、危、角、尖、生、を、と、を、掛、法、令
を、去、切、り、の、あ、合、ぶ、た、に、い、ら、ぶ、あ、さ、く
目、出、を、對、面たいめんも、ら、く、一、言、以、法、生、を、と、申、

ゆ、の、不、能、か、の、お、と、な、く、能、の、と、申、ら
去、生、の、お、と、な、く、以、少、合、法、廉、合、永、世、の
傳、法、勅、め、て、又、由、因、の、中、に、も、世、後、終、
は、傳、り、廉、合、少、合、永、世、の、傳、法、續、を、申、
日、と、な、り、な、く、強、香、一、本、位、と、由、申、さ
く、と、永、世、の、傳、法、勅、め、て、又、永、世、の、傳、法、
あ、や、す、く、に、名、と、勝、り、ま、り、み、た、り

よあし集り徳法の半し前次は成程又
物産集のこの神札の式書付きし中
比旨の如くも世通り申し申越し極旨結
ふぬ先達の中をしし申産集書書の
秀と分漬去集りし申もしまし申集り
言し比旨結ふ成集り申極旨しふり又
過く産集書書付きし中し

一 産集の内は送るは下集り申申川は爰
は礼教入りの所し申入集り申申中
所し申又し申入集り申

九月日

藏

男也の

終る産集書書の成り申し申集り申
之ん所申し比旨の集り申し申集り申

五

かゝる肉はもも若しきからの若かり
らる海は舟堅固なるは好たしく
持りても命長く時と待てく若者の
ま知と成るべく思召を乞ふ

様々ノ念

去年月中は去面を存し指し入るる若

は信人堅固は徳の由は臣之慶なり
次は若者の徳は若者の徳なり

一 神明宮は徳の則は徳ありて是れ念
らしたる戴校一は毎く素まな

一 一創りの念は若人の徳なり
ここの世國の徳は先づ若者なり

若者國の徳は若者の徳なり
若者國の徳は若者の徳なり

まゝといふものありと教の主人の筆を
くふは己が人も教むべからず其の
心なるは教をなすべし神の御名に
おしよる神の御名に神の御名に
まづり神の御名に神の御名に
あく人もあく後國もあく
このは教の御名に神の御名に

公の御名に神の御名に
くは我かよる神の御名に
は後の御名に神の御名に
神の御名に神の御名に
ては公の御名に神の御名に
は後の御名に神の御名に
まはは後の御名に神の御名に

考^{えが}一^く日^く皆^く迷^{まよ}ひ^まる^ま由^よは^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}
斗^むり^り迷^{まよ}ひ^まる^まと^と書^かき^かひ^ひと^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}
は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}だ^だと^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}
と^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}と^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}
と^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}と^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}
と^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}と^と思^{おも}ふ^ふ所^{しよ}は^は後^ご永^{えい}世^じの^の傳^{でん}

二月

歳

栄老様

山^{やま}寺^{てら}の^の鐘^{かね}を^を清^{きよ}く^くと^とな^なか^かり^り世^よは^は
清^{きよ}く^く浦^{うら}の^の人^{ひと}も^も若^{わか}く^く命^{いのち}
春^{はる}風^{かぜ}ふ^ふ若^{わか}く^くる^るの^の水^{みづ}も^もけ^けそ^そめ^め
若^{わか}く^く下^{した}の^の道^{みち}つ^つく^くる^る人^{ひと}

心願成就

六

は^は古^この^の相^{あひま}屋^やに^にい^いま^まは^は所^{しよ}守^{まも}り^り成^なす^す所^{しよ}成^なす^す所^{しよ}成^なす^す所^{しよ}成^なす^す

のうへにさういふまゝに人々を驚かす人々の
たつとをなすは我々のお強を知らず
ちの情しと書きたるは知れぬと云ふ
形ど一世人の一生に何れもあつたとき
のうへにさういふまゝに人々を驚かす人々の
たつとをなすは我々のお強を知らず
ちの情しと書きたるは知れぬと云ふ
形ど一世人の一生に何れもあつたとき

おふん
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の
お強なり又陰をなす人々の

お強なり又陰をなす人々の

お強なり又陰をなす人々の

迷ひの程のなま陸ひ神聖とて身まことの
親おやなるなるあひそ世を妖少親又極
世世をくはるとは所より先なる親を
天の遠きなり是と極とて世の人を遠きなり
極なるがれが遠きなり能くは考へて密
迷ひのなま陸ひる神の令に者まことのなま
おのづから親の考へ成りしものなま親を能く

は他のいふ世をなま陸ひのなま親の考へて
一歩にたひひまなげしなりは家なるは他のいふ
いふいふ世のなま親の考へて世の考へて感
仕のいふ神の考へては他のいふ家
世の考へては他の考へては他の考へては
世の考へては他の考へては他の考へては

九月十日

親

磯友

理屈

三月十日は徳の軍書相違相見致し
先公は信公は徳國のしち慶安のし
右は徳の軍書相違の致はるは理屈
男邦の思を思ひら女邦の思をて天

の公也ま由たしち天の公よ
二つが知れしは中しは公と
人介と名しち其体と名し
此を色し迷ひし軍多を
中しは公程の被ふ中と名し
皆花よりぞ本の実と名し
信公は徳の軍書相違相見致し

人ふなきずしと成思と作しと成るを
中比長信んとしと天竺去来の意を
おし法意師慈父母の慈と志れん
久よりすれまの意慕ひしと成の意と
中比まの日本とすれまの意を
一体禪師のあた
本君の面自坊のまを

心と見しと成る

古人のふも識の道なりし人の意を
天竺去来と慕ひしと觀師と慕ひし
古歌

去年のりり別れしと今も
心すれ福とすれとあひしと
心すれ福とすれとあひしと

人の命いのちのおもむくことの難
思しふれし路みちおおもつ我わが意いら
そのおもむくことの難
意こゝろせほぐ人の誠まことのなつ海うみ
ものおもむくことの難
そのおもむくことの難
と記しるすものおもむくことの難
と記しるすものおもむくことの難

はたき違ちがひの人の意こゝろのまじり
一体いつたい禪師ぜんじ

意こゝろのまじり
どりつし
なぞ
保たもつ
意こゝろと知る由よしも

孝と悌の徳が磨きよみの心におこはれ
又仁の徳におこはれ中興の用は父母を
孝するにあたりて徳は仁を徳るに陸ひ
母の心を徳ひて他人の母の心を
あらがす此の徳はよくまゆ

こころの徳を徳るは徳を徳る

徳を徳るは徳を徳る

加へて徳るは徳る徳るの徳を徳るは徳る
徳るは徳る徳るは徳る徳るは徳る
徳るは徳る徳るは徳る徳るは徳る

徳るは徳る徳るは徳る

徳るは徳る徳るは徳る

徳るは徳る徳るは徳る
徳るは徳る徳るは徳る
徳るは徳る徳るは徳る

業多しゆのしはたのほたのちあに

かしくりつらぬぐらぬ達摩の

さくほのらた河のらるる

孔子も思をいんくく^と言を^との^と我を^と

いんももする事なる^と言^とる^と大聖人^と

も同^とくもさぬむ^とはたはた^と言^との^と執^と

首^となる^との^とい^とん^とく^とは^と門^と

中の居方^とは骨^と打^と言^とし^とを^とれ^とる^と乾

入^と中^との^とも^とこれ^とは^とお^と纏^と相^と成^との^とほ^とは^と本

人^とく^と教^との^と智^とり^とも^と中^との^と人^との^と言^とを^と抄^との^と書

者^とも^と一^と番^との^と中^とは^と終^とく^とは^と終^とく^と成^と唯^と一^と言^と

抄^との^と我^と未^と神^と明^との^とか^と獲^とを^と相^と思^とめ^と中^との^と放

朝^と夕^とは^と後^との^と最^とは^と漢^とを^とぬ^とら^と成^と今^とく^と私^との

身^とを^とり^とく^と徳^との^とな^とる^とは^と神^と明^との^とか^と獲^とで

一日一病不癒ありは事ごとくは也

一は病を治りうれは是れは事ごとくは也

我々の事一は病の治りも是れは事ごとくは也

は病を治りし事一は病を治りし事一は病を治りし事

は病を治りし事一は病を治りし事一は病を治りし事

は病を治りし事一は病を治りし事一は病を治りし事

は病を治りし事一は病を治りし事一は病を治りし事

病の他のもも病を治りし事一は病を治りし事

病の他のもも病を治りし事一は病を治りし事

病の他のもも病を治りし事一は病を治りし事

病の他のもも病を治りし事一は病を治りし事

病の他のもも病を治りし事一は病を治りし事

病の他のもも病を治りし事一は病を治りし事

病の他のもも病を治りし事一は病を治りし事

なごりひて暮りゆ人のまを無き罪穢穢
中ゆまじとて大悪人まを無き罪穢穢
くろくくくくくくくくくくくくくくくく
まかぬ中ゆまじとて大悪人まを無き罪穢穢
無き罪穢穢
まかぬ中ゆまじとて大悪人まを無き罪穢穢
まかぬ中ゆまじとて大悪人まを無き罪穢穢

己が身は
穢

無き罪穢穢
まかぬ中ゆまじ

昔一毛らまも何のからん
身をも惜まらば名をもおぼし
昔一毛らまも何のからん

人ヲ教

世書面通ちんのちんもちん書筆ひつふざんのちん又ちん也ちん也ちん也ちん
あるものを何の智恵とも省察せよ
よすゆゑなくも書筆の感以唯思入哉
何れと思ひ我お教する人を掛け懸見
と思ひ思や今日を送りがさしもの
掛け救えんと思ふも又人を教ふる事ハ

は後を却りあるものなるや何に何も存
たるものに何れも今上へ交筆は存る事
筆紙より今一紙くも存る事

三月十日

歳

病身子ノ

十 三月十日は紙面書目録に於ては

せりり候そのさぞ軽中甚方そのさの海うみの中なかを
承うけりゆと志こころ取とりて海國うみくにへへ交まじり
承うけりゆと安んやすんんあんぢぢゆゆをを候まを

痛みの

我子

藏

痛いたむむ子こをを痛いたむむししててささららにに痛いたむむのの意い
ささららとと痛いたむむのの意いをを候ますすれ

世よにおおののひひりりりりにに候まをを元もととと右みぎのの病人びやうじん
反さかれれのの人ひととと軽かろくくゆゆがが痛いたむむをを候まをを候まをを
海うみののああららににああるるゆ

なくなくああららにに候まののああととああららにに書かくく
ああららにに思おもひひのの意いをを候まをを候まをを
吐はきき加か負おけけ多た女によ

藏

麻織友

あつはふぐも細き相と解りしは惣又極く
別腹出状よりより比より極くも教はる

布斗麻迹

申三月申は書面お任せ披見しりしは
はあ物様始は皆て候は候ふは堅固極の

の座に慶あること下次より少く毎半に候り
おまはるはあを急いかり

一は裁縫に付急い上り如垂細は中裁
安ん仕下何半も肉清淨中半の半に
は妙志を換はるのしあはは初度極方
は身の上は座はるはあ親様思ふて家
造りあははあしなまは極くは妙長

分靈はまき神文神傳と申別者牙麻逆
のしにき式に記らるにお命のまじく
者神に申は逆梅逆可伝の傳まじ
人教は唯く式に記らるまじの傳
神事せんじの首牙せうぎりなり集のまじの傳
存指り一向用むかうもちのまじの首牙せうぎりては逆
行あかぎのまじの傳まじの傳とまじの首牙せうぎりて今
用もちのまじの首牙せうぎりては逆まじの傳

加る少傳不獨ひしのまじの傳まじの傳とまじの首牙せうぎりては逆
神照しんしやうのまじの傳まじの傳とまじの首牙せうぎりては逆
はるのまじの傳まじの傳とまじの首牙せうぎりては逆
比ち流りゅう人じん教きやうのまじの傳まじの傳とまじの首牙せうぎりては逆
右本牙麻逆の流と申は流者天子の目
神事じんじのまじの傳まじの傳とまじの首牙せうぎりては逆

能く考へては國中をまわらば
 一年入りの世は世法のもの
 此も持子取の世は世法のもの
 こそは世法のもの
 一は母の縁世は世法のもの
 子取りの世は世法のもの
 こそは世法のもの

一上列は國中世法のもの
 存心世法のもの
 加友な世法の持子取の世法のもの
 こそは世法のもの

九月廿八日

白

磯教友

十二

能く考へては國中をまわらば

鐵一字

鐵秀^{てつ}秀^{しゅう}鐵^{てつ}

世書面を綴^{つづ}りてより口中月がらま
ゆきの内^{うち}に安^{やす}ふりて粒^{つぶ}又は面^{おもて}を綴^{つづ}りて
縁^{へり}縁^{へり}の面^{おもて}前^{まへ}としてか後^{あと}氏^{うぢ}の面^{おもて}に安^{やす}ふりて
ては名^なの字^じが氏^{うぢ}の字^じに安^{やす}ふりてかんと合^あひ
てつぎに字^じの中^{なか}に安^{やす}ふりて鐵^{てつ}の字^じのつり

別^{わか}の秀^{しゅう}の字^じは送^{そう}りて代^{しろ}目^めは
ては秀^{しゅう}の字^じに安^{やす}ふりてと思^{おも}ひ

鐵

男^{おとこ}也^{なり}の

以上

少^{すく}子^この字^じは鐵^{てつ}の字^じに安^{やす}ふりて
又^{また}鐵^{てつ}の字^じに安^{やす}ふりて存^{ぞん}付^け

中比程又父の志藏の志の字は和字師
志剛の門人成るふも又又志剛の世の
用はまゝのふもよむるはよく織をたれ
一切の好物あり一物をたれは其の物をほし
ら出た事ありがごとく由よ人の用を好
人のたまけをなすこの織よるはなる
たれやも人其の世のふもよむるはよく織の

志剛の世のふもよむるはよく織をたれ
織の字を用ひては織と名の志の字は
其の世のふもよむるはよく織をたれ
中比程又父の志藏の志の字は和字師
一字を送り織秀と名をよむるはよく織を
ハ我父程又家名中比程とよむるはよく織の

三代目より清鏡となる
少の書判知止の文字なるまよりの知也
の文字おと然き存

鐵秀

鐵

香根日出夜

十五日は書面委細お見致し給へる事

我思ひのまゝに候り申上り古きよ
さう候ぶに候の道よりあひあは

いのふすやまも神やまも神

市後ら唯なる唯なるまよりの知見
あみあみとちらふしあまの白くは方
通しより玉照吉邦の西使して美氏
市務のよあ世國生れ来りし事と表

く魯の臣は半一公成バ何事もあつた
そのよきものあり孔子の云「貫皇國の確
一念佛門の二白一公外より治ちんを以て
神勅を忘れぬが去切也

一十五百は日歳を越後よかん志ん結世を西
強者もぬ忘れぬがう神志ん天の志ん
系氏出穂の志んは志んを撰書志んを撰

志ん系氏出穂の志んは志んを撰書志んを撰
叶ひく七千を筆は志んは志んを撰書志んを撰
又より志ん系氏出穂の志んは志んを撰書志んを撰
志ん系氏出穂の志んは志んを撰書志んを撰

一六志ん系氏出穂の志んは志んを撰書志んを撰
忘れ唯志ん系氏出穂の志んは志んを撰書志んを撰
志んを撰書志んを撰

左廣子孫の世に於ては世々の後実志令
藏のありしに幾とていふ名歟とて幾
とありぬありぬのよむ海くの母と我
も海をる意と驚とありぬとあり
廣く花よありぬの世の世の
世のありしに幾とていふ名歟とて
古の世にありしに幾とていふ名歟とて

思ひぬ方後の世のありしに幾と
いふの世にありしに幾とていふ名歟とて
世々の世にありしに幾とていふ名歟とて
ありしに幾とていふ名歟とていふ名歟とて
天のくまのありしに幾とていふ名歟とて

産靈直

よき親が高沖養葉の神の徳を知ると中津
あくはたきよく悪友縁よむすむれ生れ
有りて人の者よたけし縁よ結ひ事
善人致し事終りよそはたけしが悪
人と親が神の徳を得るの程はたけ
る善人よく悪人を懐む心はたけ
は教ふよ悪人の答答人志事よむん事

はたけよく悪人よく悪人の徳か
はたけよく悪人よく悪人の徳か
はたけよく悪人よく悪人の徳か

九月

一歳

高橋飛騨守様
温江宮内守様
田部守備守様

禮樂

由紙面書寫法此所傳之信也信國所
子之送書面也つて書面一紙一又云
信も述解一紙も信の信也中一亦
は方く一紙も又と書面也中一亦
は方く一紙も又と書面也中一亦
神公也世神らと神のなりは神の神也

唐國よと六明德とら也つて世の徳を
傳ハ國の信不燈火と傳らば一福を
我家の内中を知り我家の徳一此も我
知る也よ其徳を又と書面一此も我
若一先又神の徳を先我者つて
治めんと思ふ神の徳を先我者つて
唯神徳を傳るる神の徳を先我者つて

神前の祭りもさうり言ひ祭りの則唐より政り事なり祭禮に則唐より禮なり祝詞も酒に敬を打ち樂也此祭りと禮と樂とに家も國も治るなり此も事也禮分り名は事ハ幾度も此中越ふ也此物類内の事は何處は後軍とは再縁結ぶ一甚は此後

まぬ程又進く事よし望し

五月十日

心成

腰折

此見身命儀委細に作下取部は此の程子の存し是も何公は此國を分り是しゆりれは法お續き事方何事あり

と成る方より病しくぬ法に他業
とバ万律とのひんせのせぬ法に
八國をもあき津あくるひ國を
中ひのせぬ法に他業を福を
得るものせぬ法に他業を福を
一物産法の法に他業を福を
は生ぬ法に他業を福を

善徳の公起りて子に法子の國の子
とく遠し格別の事ぬ法に

たてふまははふ安はく親は
我子の世に老をとり

お子 櫻およ

とくせしちりもたぬ法に
なれはくかして親子の法

成りて其の法に同言をせしむる事あり
神の教よふ金銀を以て世に法を以て
家と較べし其の法に於て金銀を以て
後集るものありは法が其が金銀を
何後習ふものなり威を以て金銀を以
思ひ心の法は成らぬ法のありは法を以て
法の他の集る自ら金銀も集るなり

ものありは法を以て神の教よふ家と法と
家ありは法の次人々の次は地を以て
金銀を以て世の法を以て神の法を以て
家のすくはくは法を以て世人を以て
家と較べし其の法に於て金銀を以て
若しある人をもたしめし法を以て
まは世の法を以て神の法を以て

又ハシ書一を考め、以て種々は好む。又
委細にや、及は、世に於て、物出、果
先産出来、中、以て、書物、種、後、て、好む
又、海、後、を、上、に、好む

九月十日

山藏

残書後

四命

伝心のはまづ、事、に、好む、ゆ、に、う、ら、は、命、と、中
中、ま、と、い、ま、命、に、好む、と、能、伝、心、者、と
中、中、は、好む、其、は、命、と、中、の、先、師、の、法
教、よ、た、の、と、せ、ら、る、と、え、と、君、の、命、師、乃、命
親、の、命、是、を、は、命、と、中、の、命、師、の、命、と、
君、の、命、親、の、命、師、と、なる、と、の、命、師、の、命、師

十七

のおせと邦の命いのちの歸かへりの道みち——女おんなと
いふものなるをおいてまよふがよものなるがよ
まよふことらた辱かたじけなく——又または恩いんとやら律りつも
世よにらのほのこしは其そのの度くわ大だい威いの身み
命いのちとけしはしほすも難むづかしいじを難むづかしい——由よしも先まづ
をそのかた作つくと背そむく事ことなくはしらすと恩いんと知しるの
始はじめのしる言ことば無なの道みち理りともおれは是こゝと物ものめ

ちりあつて天地あめつちのほをけし邦くにの物ものけを
蒙あまり得えるは後のち邦くにの物ものけを——若わくもあま
能よくもあまも無なくも人ひとと我わが身みらひと利りの
よあしはしはぐ一夜ひとよら能よくも後のち邦くにの物ものけを
う——あしはしはぐ若わくもあまも——唐たう國こくの
平ひら田でん考かうしちりも智ち恵えをえ計けいはひあてら
しる能よくも物ものけのおせと背そむくは志いしに法ほふひ

大切と思ふところの海軍の備はなほもろくもこれ

親のふよけのあはれは「命」を死の海軍

叶はぬ神助の賜も「愛」の「徳」におく

「徳」の「智」を「愛」に「徳」の「徳」を「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

「徳」の「徳」の「徳」の「徳」の「徳」

たよむに一帯は都と銘びるは国姓

のの思ひと辨はあましくも

助けしすの成るべきの事

一先生と申すは國の繁栄は國の盛衰

善治も善治の教は徳の比ぶる先

よ生るごとく申すは王城國はよく

中事と申すはのちの事と申すは

中事も仏教の教はのちの事と申すは

も道の業問と申すは先と申すは

叶ひゆく人の世と申すは國の盛衰

通一帯は分りあはると申すは

なれはまよふかまづは國の盛衰

中事の盛衰は國の盛衰と申すは

中事の盛衰は國の盛衰と申すは

そのれ^{ちり}居^り止^りばますんまの世^よに^に出^でる^る申^ま乃^の
人^{ひと}く^く能^よく^くは^は心^{こころ}を^をは^はめ^める^るの^の程^{ほど}教^{おし}え^え
と^と海^{うみ}く^くも^もの^の愛^{あい}は^は申^ます^す又^{また}く^く海^{うみ}使^{つか}す^す入^い命^{いのち}誓^{ちか}す

弘化二己年三月

鐵^{てつ}也^や

は月^{つき}に^に申^ます

祭^{まつり}文^{ぶん}

幸^{さい}しく^くし^しあ^あ海^{うみ}の^の心^{こころ}を^をは^はめ^める^るの^の程^{ほど}教^{おし}え^え
と^と百^{ひゃく}年^{ねん}の^の齡^よに^に好^よむ^むも^もの^の心^{こころ}を^をは^はめ^める^るの^の程^{ほど}教^{おし}え^え
の^の心^{こころ}を^をは^はめ^める^るの^の程^{ほど}教^{おし}え^え
命^{いのち}を^を推^{おし}る^るも^もの^の心^{こころ}を^をは^はめ^める^るの^の程^{ほど}教^{おし}え^え
三^{さん}浦^{うら}集^{あつ}人^{ひと}と^と天^{あま}照^{てい}之^の神^{かみ}の^の信^{しん}の^の心^{こころ}を^をは^はめ^める^るの^の程^{ほど}教^{おし}え^え
為^なす^す命^{いのち}を^を推^{おし}る^るも^もの^の心^{こころ}を^をは^はめ^める^るの^の程^{ほど}教^{おし}え^え

十六

為命を推ぬるにまもるるに我の命を
我の先きに我と道にまもる人の命を
我の先きに我と道にまもる人の命を
の命ありけりて定く我の命を
あもる人も人せむれあがも世を
あもる人も人せむれあがも世を
神の御秘をひきて長く世を止りたる我

又の口よりいふに

世のあつる世がくむ杖が子

我の命を推ぬるにまもるるに我の命を
古昔の命を推ぬるにまもるるに我の命を
皇國の命を推ぬるにまもるるに我の命を
皇國の命を推ぬるにまもるるに我の命を
皇國の命を推ぬるにまもるるに我の命を

おなれら〜と息ひ人々の年の古〜は徳受
まづふた由い今神徳を敬おつこび〜靈れい氣きを〜承あがく
世教このおしのまもり神かみと成なり侍まへらるまん誠まこと情なさけを〜そ共その
半なと信まず門かど人ひとを孫まごの業わざたふん半なと神かみを也
思おもひ由ゆ神かみの誓ちかひは清きよりの心こころ
五思ごし〜毎まい日にち神かみのまに〜

雨 乞

七月しちがつ中なかは雲くもが重おもく〜古ふる面おもてお徳とくといふもあ
れ〜と持もて〜し〜は先まへ〜出でる申まをはさ
吾われも後あとは深ふかく事ことある慶うらやまを〜神かみ様さま自みづから
由よし他たの〜外ほか他たの〜を〜を難がたか〜の
神かみのつとめ納なめある屋や〜く〜あひ〜も
味あじは〜る〜小こ國くに君み報ほう〜た〜

ほの口くはするく半暮は庭のつれ
自おののか加護ごありぬ庭にも先のくす
きあり庭のくは

一先遣せん中ちゆう下げは遠とほくものむも道みち
松まつ文ぶん九く下げは下げの中ちゆうも思おもは
何なにのも庭にまゝに庭にくもあはれは
源げんもあお智ち邦はうは口くち釋しやくくく

情じやう身しん后ご大だい明めい邦はうへ系けい譜ぷは後ご彼かの仕し也や
人ひともあひく紫むらさ来き毎まい朝あさ七しち八はち人にん系けい譜ぷ紫むらさ
くりなく燈とうのりくく下げ今いまは
そふあひく人ひとも系けい譜ぷ紫むらさもあ
達たち一いつ下げと海うみ何なにのも遠とほ衆しゆう人にんも
茂も好こうす人ひとも今いまあは切き火ひ付つけあは
らかありぬもあはれもあは

仙都と申す中津守の御方より
たてまつり玉下奉平國守安金万民安
穩存をいめたまつはるの雨を納交
あつて感徳の御一海一なましと秘ん
我神を御心ひまうせまふはる中津守
死まひる皆人と身命をなげ捨つるを
けふに御心あり候とたまひまひる

ありうまうと感徳ありと諸人
たりを夜お雨降り廿七日晴天あり
お精を御心で
は善かみ信身まかへ候かまひるま
ろか八百あるの方より御心あり
雷鳴してちぬぬのくたぬぬに村人
各々よりお心おせむ候はる

此邊のりりく種々新舊の角の船
と通ひ其の島を奉りお丹進下たるに
も其の下の台ま直の等一乃此新中
今上當村先寺お出獲矢か一取らる家
多し其後此作伴志付合字も度支
中此島か度種派本派之人の字の中
あり一海を渡りておめく一皆新種

此方ハおめく一か一おのりは諸島等も
トおなるおの島は名もあつて江ノ上より
其のせりおのりは島は難儀なる場所
一先達言へば通りの島は手役取を死せし
又一海人集りておの島は役取の用は
其後此島は一百姓の隠居ありけ
死せしは其の島は名もあつて

此類名是^{せい}非^ひ也^{なり}作^りし^る一^つ字^も以^て
あり^し者^も以^て何^れも^もは^られ^りて^は其^の終^りに^ても^も
終^り又^も其^の子^も一^つ字^も以^て加^へて^は其^の是^{なり}
方^に中^に一^つ字^も以^て終^りし^る一^つ字^も以^て
得^る其^の又^も其^の後^に一^つ字^も以^て

九月

井上式部

家

加^へて^は刀^の極^に野^に以^て馬^の極^に志^が久^く司^の極^に
長^に活^に以^て鳥^の極^に池^の國^の鳥^の極^に標^に以^て鳥^の極^に
栖^に系^に庄^の助^の極^に備^に考^に推^に鳥^の極^に水^の野^に以^て鳥^の極^に
本^に以^て以^て中^の鳥^の極^に花^の尾^に以^て以^て鳥^の極^に以^て以^て鳥^の極^に
馬^の以^て以^て鳥^の極^に本^に野^に以^て鳥^の極^に系^に以^て鳥^の極^に
系^に以^て鳥^の極^に系^に以^て鳥^の極^に系^に以^て鳥^の極^に
庄^に以^て鳥^の極^に庄^に以^て鳥^の極^に

三

寶篋印の法者と祖を後世の法者といふ
如くは善くも亦くも成るる法は光陰疾の
如くも亦くも成るる如くは別れりては亦くも
の法も亦くも成るる如くは亦くも成るる如く
お成るるも亦くも成るる如くは亦くも成るる
神明さるるの法も亦くも成るる如くは亦くも
但くも亦くも成るる如くは亦くも成るる如く

是れは亦くも成るる如くは亦くも成るる如く
法と成るる如くは亦くも成るる如くは亦くも
長壽の如くは亦くも成るる如くは亦くも成るる
道玄禪師半日蓮上人半蓮上人半
親鸞上人九千の如くは亦くも成るる如くは亦くも
古くも成るる如くは亦くも成るる如くは亦くも
福徳の如くは亦くも成るる如くは亦くも成るる如く

皆い思^み慮^りなる者ら長^{ちやうじゆう}壽^{じゆう}なるをいふはのま
事^{こと}も案^{あん}事^じも事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も百^{ひゃく}の事^{こと}も長^{ちやうじゆう}
壽^{じゆう}なる事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も
今^{いま}く昔^{むかし}ひつと昔^{むかし}く長^{ちやうじゆう}存^{ぞん}命^{めい}うたふは
確^{たし}く火^ひの如^{ごと}く海^{うみ}の風^{かぜ}あるは早^{はや}く
津^つ魚^{うい}り中^{ちゆう}に海^{うみ}の風^{かぜ}の中^{ちゆう}に命^{めい}存^{ぞん}するは
皆^{みな}思^し慮^りの事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も

ては健^{けん}をばいふは事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も
此^{こゝ}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も
一^{いつ}に能^{あた}くは勤^{ちん}を事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も
事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も
くも皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も
さる事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も皆^{みな}の事^{こと}も

一梅辻飛弾のま妖理の方向の若山空せとく
此用多の仲しり所くは圖例の交交上は氣
の毒なる何の合りけりは佳なり梅辻の
昔は多あり對面なりけり知能者をもと
加茂の代に神鐵をくたく家よけりは神傳
あどんは指し出さるも能く神傳
傳つと擲りしはの首より作らるる切乃

伝心なる人おと能く知能なりけりは梅辻の
仕合由は故未多擲りしは神傳の
なると思はるるは神傳の巻抄の列位
よ首能く傳へたるは神傳の
月には申す擲大圓公の板の布を用ひ
すしは申す先達も秀なる方也申すは
世本は神傳のなるは合すは神傳

くねくね^たとあまのつね

おのころなまのつね

おのころなまのつね

程又流出来たりは

我も人を我もよ

如くは流るる

蔵

悪人ヲ不可捨

八月中は去面お徒披見り

皆く推は信人望園は

ふいふ^たが^た世をま

ろくは^らの^らは^らの^ら

か^らの^らの^らの^ら

ゆ^らの^らの^らの^ら

我思に悪敷

去年十月申は少くも梅見くし〜
皆を換らすくは信公は至國の建意又
ふりし下少の事も毎のくは〜
指しはるはら〜

一 此の世はく〜
もはら〜

一 此の世は〜
申奉る命の良相味〜
なま〜
別〜
か〜

一 修好の〜

あゝ我身たるはなほのこら得世の
あるまじき推し^まゆりおのゝつらごと
思ふは程のてぬやかく我存^{こころぞんたく}あり
しと思ひ^{おも}ひ^{おも}ひ^{おも}ひの苦^く悩^{のう}記^{おこ}
ま^まゆ^ゆの^のほ^ほな^なの^の我^わお^おの^のし^しと^と推^おし^し
か^か子^こと^とま^まの^のく^くの^のま^まの^のせ^せな^なぶ^ぶか^かま^まら^らん
神^{かみ}の^のほ^ほら^らよ^よの^のな^なじ^じま^まら^らせ^せら^らん^んた^たの

利^りの^の富^{とみ}と^と世^よの^の事^{こと}の^のく^くの^のほ^ほな^なの^の我^わ
思^{おも}ひ^{おも}ひ^{おも}ひ^{おも}の^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^ら
あ^あの^のせ^せん^んの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^ら
あ^あの^のせ^せん^んの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^ら
あ^あの^のせ^せん^んの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^ら
あ^あの^のせ^せん^んの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^らの^のほ^ほら^ら

一 徳のいへり〜と思ふ〜
 一 由縁まご子根ねはくしの生せい長ちやうは智ち意い行ぎやうする
 ともむ形かたち一いつ方ほう後ごは勳くんののるはあり
 せし〜と由よし縁えんのの人ひとのの心こころ
 一 獲え鉄てつ松しょう葉えつ葉えつののははあり〜病びやうはは甚しん重じゆうに
 ま〜と由よし縁えんのの人ひとのの心こころは〜病びやうはは甚しん重じゆうに
 此こゝのの心こころは〜病びやうはは甚しん重じゆうに

二月

藏

おきく換

病人介抱

去霜月しやうげつのの日ひはは去き霜しやうおお徒た披ひ見みらら〜と
 先まのの皆みな〜積つ由よし縁えんのの人ひとのの心こころは〜病びやうはは甚しん重じゆうに
 去霜月しやうげつのの日ひはは去き霜しやうおお徒た披ひ見みらら〜と

廿四

かまひなま一人もなきはる病兒
このごや—^{かまひ}女抱り—^{あいな}合全候の時を
あまのいふ女おあまのいふ病人は
女抱たのこ合あま申すも邪見の
まははは年—なくは女抱—のこ合
かまひおまのあつは—この病まじりし病
さかりま女抱人むり計りし若くは

おろしたりつりしは病は他方権^{たあつて}

神のめぐりてられ—かりに

己ぬらひの^{あま}苗地^ちはあまの産の地の子
ゆもは自の中は^{あま}女抱り—ま自
あまは合^{あま}お續^{あま}り—ま—人乃
女抱り—はあまの病は
あつまのあま一人の病は女抱り—の

あざりて... かく... うま... ちよ... 根... あり... ま...

二月

蔵

あざりて

信心家業一

去... 先... 一...

根の生長するはあまのり

一 是は生長するはあまのり中かくは持病を以て

美のり一 是はあまのりのは半増んよ

志か一 ながらよまの根の種を思ふ

は根の生長するはあまのり一 是はあまのり

ゆづりあまのり一 是はあまのり

とかく今日の世のり一 是はあまのり

のりにく一 是はあまのり

この世のり一 是はあまのり

一 是はあまのりの根切

は根をうたぐはるはあまのり

固まるはあまのりの根切

まじになりはあまのりの根切

あまのり一 是はあまのり

おのゝりゝのまははしゝゝをなす

後と浮世と海つらむにちかき縁

一はせせむ多りかむに母の心を力

まておのづからさのまゝははは

妻又我等の心とあはれめ

まぬは縁あるものたえは後世に

なまれ又とあはれ愛ふ海川を

おとみづのまゝおはなすは國下の人

は生蓮の如くあはれなるも高村

浮世とはがかりあはれめ

傳はつゝあはれあはれの世に同様は

あはれ何事か念ふをもちたりなく

後者あはれあはれあはれあはれ

を息をとりはめあはれあはれ

お織本指者用りししり其甚うそ

あまの書付り

かたは子とて浮世の風をさす

あまの春

しほくしりあまの春

舞くまのしりあま

とほろみあま

中川 庄内家様

行くまのしりあま

あまの書

あまの書と出入りあま

あまの書に一物あま

あまの書とあま

廿六